

日本国外における 舞踏家の活動を探る

お茶の水女子大学 相原朋枝

研究目的

舞踏は1960年代に土方巽が創始した前衛舞踊であり、70年代に入ると彼の影響を受けた舞踊家各々の活動へと拡大した。70年代後半から80年代になると舞踏家はその活動のフィールドを日本国外、特にヨーロッパに広げ¹⁾、そこで公演活動と並行し様々な国籍の人々に対するワークショップを継続的に行っている。受け手は舞台はもちろんのこと、このようなワークショップを通じて舞踏に接し、クラスが舞踏のひとつの窓口となっている。本研究は、第一段階として、ヨーロッパにおける舞踏の登場の概要をふまえ、日本国外にて継続的に活動を続ける1人の舞踏家にインタビューを行い、彼の発言に焦点を当て、ワークショップにてどのような意識で舞踏を提示しているかを探ることを試みている。今後段階を経て日本国外における舞踏家の活動を明らかにすることを最終的な目的としている。

先行研究

舞踏に関する研究論文は1980年代より国内外で数本発表され、その中心は創始者である土方巽の思想、技法に重点がおかれた研究となっている²⁾。その中で実際に数名の舞踏家のワークショップに参加し、フィールドワークを用いて舞踏の身体に迫った研究論文がある(LAAGE, 1993)³⁾。この著者のような研究者のみならず現在活躍中のダンサーの中にも舞踏のクラスの経験者やその影響を明言するものは少なくないが、発信者である舞踏家が実際どのような意識で舞踏を提示しているかは、明らかにされていない。また「舞踏は、現在、我々が思っているよりも国際的になっている」⁴⁾に

も関わらず、日本国外での広がりについては未だ十分に明らかにされていない。

方法と試み

1. 方法

1.1. 対象とする舞踏家

日本国外で活動する舞踏家⁵⁾は少なくないが、本研究では①最も早くヨーロッパにて活動を始め、その後20年以上と比較的長くヨーロッパを中心に活動している。②活動において「国際性」を意識している。③「舞踏」「Butoh」の名称で国外で継続的にワークショップを行っている、などの理由から舞踏家室伏鴻を対象とした⁶⁾。

1.2. 方法

文献よりヨーロッパにおける舞踏の登場を明らかにする。2000年のオーストリアのダンスフェスティバル [International Tanzwochen] に参加するとともに、室伏鴻の舞踏のクラスを観察。現地での談話を経て同年9月に日本にてインタビューを行った。

2. 日本国外における舞踏家の活動

室伏は一つの技法や型としてではなく、「アンチダンスのダンス」⁷⁾として舞踏を提示している。クラスを通じて受講者らが「西洋的な方法論の中へ東洋的な身体論、身体技法を持ち込み」⁸⁾、「それを踊りの中に組み込んでね、新しい踊りを創っていけばいい」⁹⁾と新たなダンスを生み出す体験としてクラスを位置付けている。なお紙面の都合により「ヨーロッパにおける舞踏の登場」「室伏鴻の活動の特色・略歴」については割愛した。

まとめ

80年代に舞踏は活発な公演活動や出版物等によってヨーロッパにて広がりを見せた。室伏鴻の発言より舞踏を新たな踊りを生み出す一つの可能性として提示する、開かれたものとして提示することが意識されていることが明らかになった。今後他の舞踏家の活動及び受け手側への調査を経て舞踏の受容状況を明らかにすることを課題とする。

- 1 ヨーロッパでの登場の後にアメリカでも舞踏が広く知られるようになるのだが、これについては別の機会に述べる。
- 2 三上賀代『土方巽研究—暗黒舞踏技法試論』1998年 お茶の水大学学位論文
KURIHARA, Nanako. *The Most Remote Thing in The Universe : Orirical Analysis of Hijikata Tatsumi's Butoh Dance*, New York University 1996
- 3 LAAGE, Elizabeth Joan. *Embodying The Spirit : Significance Of The Body In The Contemporary Japanese Dance Movement Of Butoh*, Texas Woman's University 1993
- 4 石井達朗「未知で未完なるものに向けて」『四季の

- ための二十七晩』1998年 慶應義塾大学アートセンター, p.14
- 5 中でも評価が高く、活躍が目立つのは舞踏家大野一雄と山海塾であろう。
- 6 最終的には前述した舞踏家や他の舞踏家の活動を明らかにする必要があると考えている。
- 7 筆者による室伏鴻へのインタビュー, 2000年9月25日
室伏は60年代における初期の舞踏の活動をふまえて「アンチダンス」の話を用いている。この点についてはあらためて考察する必要がある。
- 8 筆者による室伏鴻へのインタビュー, 2000年9月25日
- 9 筆者による室伏鴻へのインタビュー, 2000年9月25日